

No. 52	昭和60年6月25日発行 編集：後藤光男 〒591 堺市百舌鳥西之町1丁目98-2 陵南住宅1号棟116号 電話：(0722)57局7009番
<h1>ねじればね</h1>	発行：日本甲虫学会 〒658 神戸市東灘区御影山手2丁目19-8 大倉正文方 電話：(078)811局2706番 郵便振替口座 大阪9-39672番
June, 1985	

## 雨石山麓において鶏肉トラップに誘致された 甲虫類について (1)

林 靖 彦

食肉トラップによる甲虫類の採集記録は数多あるが、四季に互り詳細に調査されたものとしては上村清氏他による「常念岳の食屍性甲虫の分布と様相」(以後上村1960と略す)の右に出るものはない。筆者は兵庫県と京都府の境にある雨石山の甲虫類の調査の一つとしてその山麓に定置トラップを設けて、1979年11月初めから1980年12月上旬までの13ヶ月余に互り、計137回点検、採集を行った。

誘致された甲虫類は16科6,300頭前後に達し、一部を除いて整理、分類が終ったので、まとまった群から逐次発表して行きたいと考えている。本文に入る前に発表の機会を心よく与えて下さった日本甲虫学会の大倉正文、後藤光男の両氏に厚くお礼申し上げます。また、常日頃から甲虫類の研究活動、同定、文献などでご指導、ご援助いただいている芝田太一氏をはじめ沢田高平博士、久松定成の諸氏のご厚意に心から感謝致します。

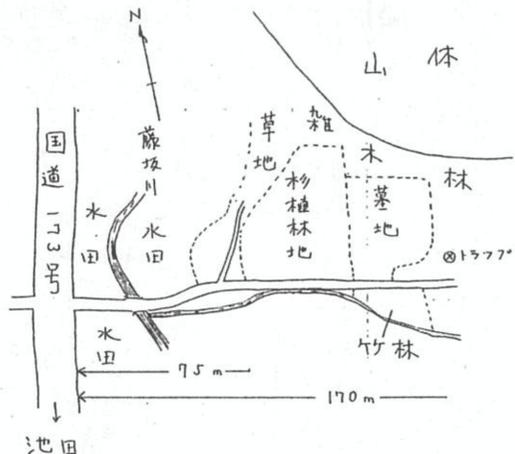


図1. 調査地点

## 1. 調査地点および調査方法

**調査地点：**兵庫県多紀郡篠山町の北東部にある雨石山（標高607m）南麓の標高265m地点の古い栗林の中で、図1のように国道から近い地点だが、道路との間に小規模な杉の植林が有る故か自然環境がよく保たれている。

雨石山は多紀連山の東に位置し、周囲には特に高い山はなく、いわゆる低山地の典型の一つと言える。山腹は急傾斜で、南面は岩肌の露出した所が多く樹林は疎で植林はほとんど見られないが、北面は岩が少なく広範囲に上方まで植林が見られる。また、この山は由良川と加古川の分水嶺の一つでもある。

トラップ設置点のある南麓は西に緩く傾斜した浅い谷あい、部分的に小規模な植林を認めるが大部分は貧弱な雑木林である。これは林床に土壌分が非常に少なく、礫が多いためと思われる。トラップ設置点は、陽光は木もれ陽程度だが明るく、下草はあまり茂らず、中間層もほとんどなく林内の見通しはよい。上層はよく茂っている。

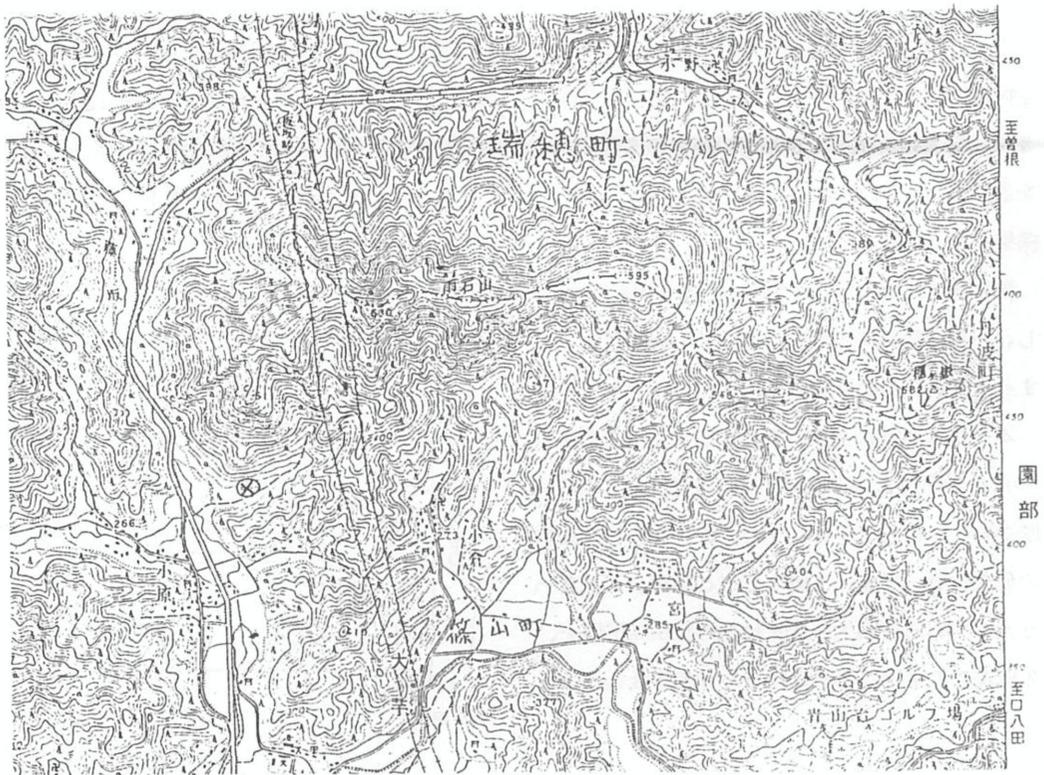


図2. トラップ設置個所(⊗印) (国土地理院地形図「村雲」から)

調査方法：トラップ(図3)は口径12.5cm、深さ13cmの菓の空き缶で蓋のあるものを用い、蓋には径1~2cmの孔を10数個あけた。地面に缶の深さに穴を掘り、缶の廻りは崩れないようにセメントで固め、雨水の入らないように缶の上方にコンクリートの天蓋を被せた。誘因物としてニワトリの骨つき肉(50g程度)を用いた。トリ肉は冬で2週間に1回、夏期には2~5日に1回の割で状態が悪くなったら取り変えた。缶も夏期には月に2~4回交換した。点検、採集は冬期で週1回ぐらい、初夏から秋口は連日または3~4日に1回であった。なお、調査地点の積雪は多い冬は40cmに達し、年によっては1月以上積雪の続くことがあるが、調査した冬は雪はきわめて少なく、トラップが雪に埋もれている日はほとんどなかった。

調査月日：以下に列記する。

1979年11月-4, 9, 12, 19, 24; 12月-1, 4, 8, 15, 22, 29; 1980年1月-5, 12, 19, 26; 2月-2, 9, 13, 20, 27; 3月-6, 15, 19, 25, 28; 4月-2, 5, 8, 11, 18, 21, 23, 26, 29; 5月-2, 5, 7, 10, 12, 14, 17, 19, 21, 23, 24, 26, 28, 30; 6月-2, 3, 4, 6, 9, 11, 13, 14, 15, 17, 18, 20, 21, 23, 25, 27, 28, 30; 7月-1, 4, 5, 7, 8, 9, 12, 14, 15, 16, 17, 19, 23, 26, 29; 8月-1, 2, 4, 7, 9, 11, 12, 15, 18, 20, 22, 23, 27, 28, 29; 9月-1, 2, 4, 6, 9, 11, 12, 13, 16, 17, 19, 21, 23, 24, 29; 10月-1, 3, 4, 6, 8, 13, 15, 17, 20, 21, 24, 26, 28, 30; 11月-2, 4, 7, 11, 17, 19, 21, 25, 28; 12月-1, 5, 8。

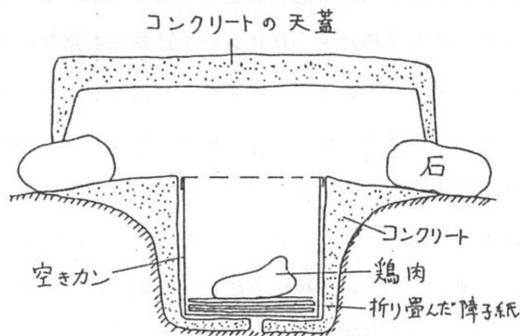


図3. トラップの設置状況

## 2. 誘致された種とその季節的消長

**誘致された種：** 各科別にまとめて列記したが、未同定の種も少なくないので、少なくとも科全体の流れが判るようにした。

**季節的消長：** 各科別に各種の旬別の誘致状況を表にした。さらに、上村1960との共通種を中心に誘致状況を比較し考察を加えた。

### シテムシ科 SILPHIDAE (8種885頭) -表1-

1. クロシテムシ *Nicrophorus concolor* KRAATZ
2. ヨツボシモンシテムシ *Nicrophorus quadripunctatus* KRAATZ
3. マエモンシテムシ *Nicrophorus maculifrons* KRAATZ
4. コクロシテムシ *Ptomascopus morio* KRAATZ
5. オオモモプトシテムシ *Necrodes asiaticus* PORTEVIN
6. クロボシヒラタシテムシ *Oiceoptoma nigropunctata* (LEWIS)
7. ベッコウヒラタシテムシ *Eusilpha brunneicollis* (KRAATZ)
8. オサシテムシ *Pelatines striatipennis* LEWIS

**考 察：** 上村1960と共通で個体数の多いクロシテムシ、ヨツボシモンシテムシ、コクロシテムシを比較して見ると、クロシテムシとコクロシテムシは両地ともによく似た経過をたどることが判る。即ち、両者は両地ともに来集初期の5月下旬から6月上旬に第一のピークがあり、しばらく低迷したあと再び8月にピークがあるが、9月中旬には急に誘致されなくなる。こういう経過を見るとこの2種は年2化と推察される。また、この2種は常念岳においては季節の推移による棲息域(よく誘致される地帯)の変化は見られない。一方、ヨツボシモンシテムシは通年しての消長の全体像は両地の間に大差ないと考えられる。両地ともに誘致初期の5月から個体数も多く、雨石山では7月上旬~中旬と、9月中旬~10月上旬にかけてさらに大きなピークがあり、常念岳では7月上旬から9月上旬にかけて長いピークがある。以上から推察するとヨツボシモンシテムシは年2~3化と考えられる。ただし、成虫越冬かどうかは判らない。また、本種は常念岳においては春→夏→秋と季節の推移につれて低山→中山→亜高山→中山→低山城と誘致密度の高い地点が変化していき、夏期には低山城ではほとんど誘致されていない。この現象は高山地帯では季節の推移により本種が棲息域を移動していくものと考えられる。

### チビシテムシ科 CATOPIIDAE (14種1,387頭) -表2-

1. ハギニセチビシテムシ *Ptomaphagus kuntzeni* SOKOLOWSKI  
4月から7月上旬に低山~中山地帯で得られているが個体数は多くない。



2. イシハラヒメチビシテムシ *Nemadus ishiharai* MIYAMA

晩秋に得られたものはやや小さいように思われるが、区別点は見いだし難い。明るい林内を好むように思われる。個体数は多くないが各地で得られている。

3. クリバネチビシテムシ *Micronemadus pusillimus* (KRAATZ)

明るい林内や林縁を好むようで、個体数は多くないが各地に普通。初夏に多いようである。

4. カバイロコチビシテムシ *Sciodrepoides fumatus* (SPENCE)

5. キョウトコチビシテムシ *Sciodrepoides tsukamotoi* NAKANE

低山地では5月上旬頃まで得られるが、少ない。

6. ホソムネコチビシテムシ *Mesocatops japonicus* (JEANNEL)

7. ヒレルチビシテムシ *Catops hilleri* KRAATZ

8. *Catops* sp. A

ビルマ産 *C. tuberculatus* SZYMCAKOWSKI に非常に近く、目下検討中である。また、外見上ヒレルチビシテムシに極めてよく似ていて、♀では同定に迷うことが多々ある。ヒレルよりは触角第6、8節がずっと短かく、♂前脛節内縁が直線的で♂交尾器の形が異なり、♀第4、5腹板の圧痕が異なるなどで区別できる。本種は今の所、雨石山以外の標本を見ていない。

9. ルイスチビシテムシ *Catops angustitarsis lewisi* JEANNEL

10. *Catops* sp. B

11. *Catops* sp. C

12. *Catops* sp. D

13. *Catops* sp. E

14. クシヒゲチビシテムシ *Catopodes fuscifrons* (KRAATZ)

考 察：表2を見て、まず気の付くことは7月下旬から9月上旬までチビシテムシが全く誘致されていないということであろう。常念岳においても盛夏のころは個体数が非常に少ないことから推察すると、チビシテムシ類は本来的に春と秋に発生するもののように思われる。

上村1960と比較的個体数の多い共通種を比較して見ると、カバイロコチビシテムシは両地ともに4月末から5月にかけて発生のパークがあり、雨石山では秋にはほとんど見られないが常念岳では夏から秋にかけてもわずかに散見される。常念岳においては本種が低山域と亜高山域にのみ多く誘致され中山域が極端に少ないのはトラップの設置場所(環境)に起因するものと考えられる。ホソムネコチビシテムシは常念岳では少ないようで、全期間を通じ散見される程度だが、雨石山では多く、4月上旬から5月上旬にかけ第1化が出現し、9月中旬から第2化が出現するものと考えられる。また、本種は初冬まで活動するようだが、成中越冬ではないように思われる。ヒレルチビシテムシは常念岳

では9月中旬から、雨石山では10月中旬からと言うように出現に1月のズレがあるが、両地とも誘致のピークは10月下旬から11月にかけてである。雨石山においては厳冬期にも誘致されていることから、本種は年1化で秋に発生し成虫越冬するものと考えられる。雨石山において1979年11月と1980年11月の誘致された個体数に、極端な差のある原因は不明である。環境要因にはあまり差がないと考えられるので季候的因子による差と考えている。クシヒゲチビンデムシは常念岳においては低山～中山地帯下層に多く、4月下旬から6月上旬と10月中旬～11月上旬に誘致のピークがあり、6月下旬から7月中旬にかけてはほとんど誘致されていない。一方、雨石山においても10月に誘致のピークがあるが、5～6月頃にも散見された。しかし、5～6月のものは早のみであった。これらのことから推論すると、本種は常念岳では年2化で一部は夏眠するものがあり、雨石山では年1化秋に出現し一部は成虫越冬するものと考えられる。

雨石山のみに見られた *Catops* sp. A は個体数も多く、誘致の消長がヒレルチビンデムシとほとんど重なっており、両者は生態的にほぼ同じで競合しているが、当地ではヒレルチビンデムシの方が優位と考えられる。前記したように本種はヒレルチビンデムシに形態的にもよく似ているので、後者の記録については見なおしが必要ではないかと考えられる。

全体的に見ると雨石山におけるチビンデムシ類は、春期は比較的多くの種が、また秋から初冬にかけては多くの個体数（総個体数の7割）が誘致されている。 (続く)

## 新入会員

住所変更



退会



昭和59年度 収支決算書

(自 昭和59年 1月 1日)  
至 昭和59年 12月 31日)

収入の部		支出の部	
会費	円 1,800,600	印刷費	円 1,818,000
バックナンバー代	231,600	通信費	196,210
別刷代	58,850	消耗品費	24,660
寄付金	5,000	大会費	18,600
函鑑印税*	92,061	雑費	3,400
雑収入	24,088	仮受金引当金	367,821
仮受金	367,821	前期繰越不足金	166,685
次期繰越不足金	15,356		
計	2,595,376	計	2,595,376

\* 現在までに学会へ繰入れられた印税合計 2,258,343円

特別会計収支計算書（会報発行基金）

昭和59年1. 1. 前期繰越金	1,018,977	円
1.20. 40万円貸付信託収益金(58. 7.20~59. 1.19)	9,776	
3.26. 金銭信託収益金(58. 9.26~59. 3.25)	6,471	
5.20. 40万円貸付信託収益金(58.11.20~59. 5.19)	9,516	
7.20. 40万円貸付信託収益金(59. 1.20~59. 7.19)	9,516	
9.26. 金銭信託収益金(59. 3.26~59. 9.25)	6,752	
11.20. 40万円貸付信託収益金(59. 5.20~59.11.19)	9,126	
12.31. 次期繰越金	1,070,134	

「昆虫学評論」のバックナンバー購入のお願い

昭和59年度の決算報告書のとおり、最近赤字が慢性化しています。当会のバックナンバーの価格は下記のとおりで、現在では第6巻或いは第7巻以降は全冊が揃いますから、この機会にご購入いただき、当会にご協力をお願いいたします。なお、「ねじればね」前号(1651)に一部価格の誤りがありますので、下記のとおり訂正いたします。

第1巻第1号、第2号および第4巻第2号	全部で	300円
第6~10巻	各巻はそれぞれ1,000円	" 5,000円
第11~15巻	" 1,500円	" 7,500円
第16~20巻	" 1,500円	" 7,500円
第21~25巻	" 2,000円	" 10,000円
第26~30巻	" 2,500円	" 12,500円
(ただし、第30巻のみ購入の場合は3,000円)		
第31~35巻	" 3,000円	" 15,000円
第36~38巻	" 4,000円	" 12,000円
<b>第39巻</b>	<b>" 5,000円</b>	

総目録：第1~10巻、第11~15巻、第16~20巻、第21~25巻、第26~30巻、第31~35巻

をそれぞれまとめて購入される場合は、それに該当する総目録は無料で差しあげます。

なお、当該総目録のみ希望の場合はそれぞれ200円、全部で1,200円です。

送料はすべて無料(学会で負担)です。

## 「昆虫学評論」に投稿の際のご注意

昆虫学評論に投稿される場合、下記にご留意願います。最近、杜撰な原稿が多く、編集に余分の時間を要しますので、投稿規定のご熟読をお願いします。なお、原稿は必ず**タイプした原本**をお送り下さい。ゼロックスしたものを送りになる場合がありますが、当会へはタイプしたものを送りいただき、ゼロックスしたものは執筆者の控として下さい。

投稿規定4のように、学名には**アンダーライン**を、命名者その他の氏名には2字目から**スモールキャピタルの記号**の二重線を引いて下さい。

文献の省略は規定7のように願います。特に、**巻号および頁数の表示**は、事例に従って下さい。

図版は**厚紙に貼付**し、規定8の後段のように必ず本文とは別の用紙に一括して説明を記入して下さい。

校正をお願いした初校で、文章をかなり訂正される方がありますが、**原稿は充分推敲したもの**をご投稿下さい。今後文章の訂正には応じかねますから、充分注意して下さい。